

## 「わたしたちを助ける人なんかいない」… 1年で変わるキナマンガ村住民

### 「事業が始まるまで、私たちを助けてくれる人なんかいないと将来に絶望を感じていました」

キナマンガ村でのミーティングは、住民が農作業を終えた18時に始まりました。昼間に受益者18名のうち6名の農地の見学を終えていた私は、この言葉に愕然としました。自治体から無視され続けた先住民とはいえ、こんなに希望の無い言葉を聞いたのは初めてです。しかも彼らは1ヘクタール以上の土地の耕作権を持ち、年1回陸稲を、年3回トウモロコシを収穫しているのです。この収穫だけでは自家消費にも足りず、近隣の農場での日雇いで食い繋ぐ現状がここにありました。

両親と子ども5人を標準家庭とすると、90ペソ(180円)する1ガンタ(2.2kg)のコメを2回の食事で消費します。日雇い仕事は1日100ペソ(200円)。つまり100ペソの稼ぎだけだと、朝・昼を食べて、夜は食べずに就寝するのです。

また小学校は6キロ先。お金が払えれば送り迎えをオートバイに頼みますが、1ヶ月1人250ペソ(500円)。これが5人分ともなると大変です。現在の親世代が小学生のころは歩いて通っていたそうですが、低学年に6キロの道のりはとても疲れます。

フィリピン人男性は一般に子どもの面倒をよく見ますが、この村の男性たちは本当に子どもを大切にしています。パラノキゴム植林3年計画の3年目を終え、冒頭の言葉は次のように続きました。

### 「私たちは今、子どもたちの未来の準備をしています」

なんてステキな言葉でしょう！そして次のチャンスを得るため組合化し、自治体とも交渉していく力を付ける、と約束してくれました。(三井物産環境基金助成)



集会所で行われたミーティングの様子

## インパクト大！キャベツ満載のトラック —スフ村・フィタック村の高原野菜作り—

6月の有機農法セミナー直後は農薬を使わないでも大丈夫という話でしたが、9月末の現地の会計報告には、少額ながら農薬類の購入が含まれていました。プランテーション拡大をストップするには、モデル地区で成果を出さなくてはなりません。有機農法の方針に変わりはないものの、キャベツ畑には最小限の農薬を使用したようです。

9月中旬、市場の動向をみながら出荷が始まりました。キャベツに続いてニンジンやピーマンの袋を満載した小型トラックが、山道を下ってジェネラルサントスのマーケットに向かいました。企業ではなく、村の仲間が栽培した野菜を満載したトラックを見た近隣住民は、農業資本に土地を貸さない選択があることを確信したようです。CMIPには、事業に参加させてほしいという希望や問い合わせが相次いでいます。

急傾斜地にはゴム苗木や在来種苗木も植えました。当面は高原野菜収入で、数年後からはパラノキノキの樹液採取で生活を支えるという夢の実現に向けた一歩を踏み出すことができました。事業は2回目の収穫を終える2月まで続きます。(日本国際協力財団助成)



## レイクセフのティバウ島生態系回復事業

ここ10年間、ダグマ、ロハス両山系でPFPと協働してきた熱帯林修復の事業は単なる植林ではなく、数年後の収入が期待できる果樹やゴムノキ育成を組み合わせています。ティバウ島も生態系保護を声高に叫ぶだけでは焼き畑の拡大、斜面の農地化に歯止めがかかりません。

来年度は、今年の果樹育成やティラピア養殖支援に引き続き、ビーズ細工など女性の副業支援も含めた事業を実施するため、再度イオン環境財団に助成申請しました。